NOTES

障害者対応トイレに対する一般生活者の意識

― 公共トイレのユニバーサルデザインに関する一考察 ―

研究開発室　水野 映子

ー要旨ー

① 「多目的トイレ」「だれでもトイレ」などの名称で呼ばれる公共トイレが増えている。これらを含めた障害者対応トイレについて、一般生活者の使用実態と意識に関する調査を実施した。

② 一般生活者の中で、障害者対応トイレを使ったことがあると答えた人は過半数を占めた。

③ 障害者対応トイレを使ったことのある人の中で、６割強の人は乳幼児・要介助者などを伴わず一人で行っている。その理由で最も多いのは「一般トイレが混んでいたから」である。一人で使うことに対しては８割近い人が抵抗を感じている。

④ 一方、乳幼児と一緒に障害者対応トイレへ行った人は、障害者対応トイレを使ったことのある人のうち約４割である。また、使った理由の１位には「ベビーカーや子どもと一緒に入るスペースが必要だったから」があがっている。

⑤ 車いす使用者以外の障害者や高齢者、乳幼児連れの人なども何らかの形で障害者対応トイレを使えるようにした方がよいという意見が、多数を占める。

1. 調査の概要

障害者を含めたすべての人にとって、公共トイレ[*1]は安心して外出するために不可欠な存在である。かつては、障害者、中でも車いす使用者の専用トイレを設置することにより、公共トイレのバリアフリー化を図ろうとする傾向が強かった。しかし近年では、ユニバーサルデザインの考え方の広がりに伴い、乳幼児連れの人や高齢者など、障害者以外の人の利用も想定したトイレ－「多目的トイレ」「多機能トイレ」「だれでもトイレ」「ユニバーサルデザイントイレ」などの名称で呼ばれるトイレ－も普及しつつある。本稿では、こうしたトイレも含め、車いす使用者等のための設備や広いスペースのあるトイレを「障害者対応トイレ」と総称している。

障害者以外の人も障害者対応トイレを使うようになった現在において、今後の障害者対応トイレのあり方を考える上では、彼らの使用実態やニーズを把握する必要がある。そこで本稿では、図表１の要領で実施したアンケート調査の結果から、一般生活者の障害者対応トイレの使用状況と障害者対応トイレに対する意識を明らかにすることとした。

なお、本調査では一般トイレに関する質問も設けたが、その結果については別の機会に述べる。

図表1　アンケート調査の概要

- 調査対象：全国の20～79歳の男女600名（当研究所の生活調査モニターより抽出）
- 調査時期：2004年12月
- 調査方法：郵送配布、郵送回収
- 有効回収数（率）：587（97.8%）

2. 障害者対応トイレの使用状況

(1)使用経験の有無

障害者対応トイレを使ったことがあるかどうかをたずねたところ、全体では「ある」（52.6%）が過半数を占め（図表２）、「ない」（46.3%）をやや上回った。

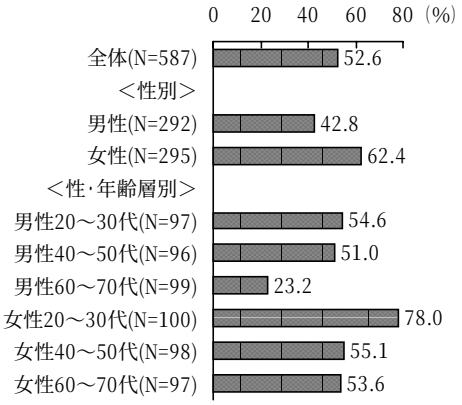
障害者対応トイレを使ったことがある人の割合を性別にみると、女性の方が男性より約20ポイントも高い。さらに、性・年齢層別にみると、女性20～30代では８割弱が、男性20～50代と女性40～70代では５割強が、使ったことがあると答えている。

(2)使用頻度

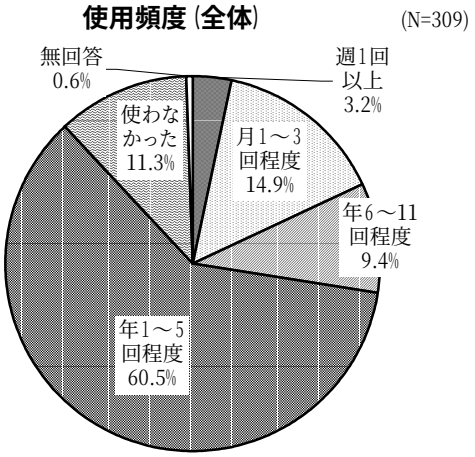
障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、この１年間の使用頻度をたずねたところ、「使わなかった」と答えた人は11.3%に過ぎなかった（図表３）。すなわち、９割近い人がこの１年間に障害者対応トイレを使っている。ただし、「年１～５回程度」が６割強、「年６～11回程度」が１割弱であり、年数回程度の人が大半を占める。

なお、図表は割愛するが、性別にみると使用頻度の差はほとんどない。また、性・年齢層別にみると、若い人の方が使用頻度が高い傾向にある。

図表2　障害者対応トイレを使ったことがある人の割合（全体、性別、性・年齢層別）



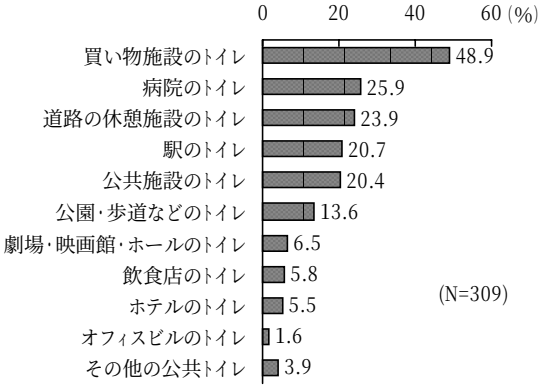
図表3　この1年間の障害者対応トイレの使用頻度（全体）



(3)使用場所

障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、どのような場所で使ったかを複数回答でたずねたところ、「買い物施設のトイレ」が半数近く（48.9%）と圧倒的に多かった（図表４）。次いで「病院のトイレ」（25.9%）、「道路の休憩施設のトイレ」（23.9%）、「駅のトイレ」（20.7%）、「公共施設のトイレ」（20.4%）がそれぞれ２割台となっている。

図表４　障害者対応トイレの使用場所
＜複数回答＞（全体）

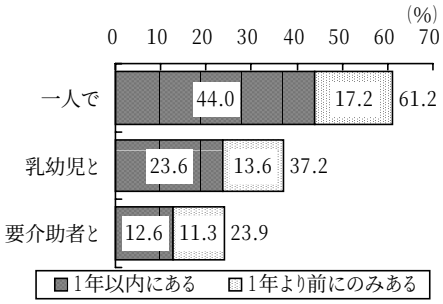


参考までに、一般トイレの場所別使用頻度をみると、「買い物施設のトイレ」を年１回以上、あるいは月１回以上使う人は、他のどの場所よりも多い（図表割愛）。買い物施設では一般トイレも障害者対応トイレも、ともによく利用されているといえる。

(4)同行者

障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、だれと使ったことがあるかをたずねたところ、一人で使ったことがある（「１年以内にある」＋「１年より前にのみある」）割合は61.2%であった（図表５）。乳幼児（小学校入学前の子ども）と一緒に使ったことがある割合（37.2%）はこれより低く、障害者・要介護者などの介助を必要とする大人（以下、要介助者）と一緒に使ったことがある割合（23.9%）はさらに低い。

図表５　障害者対応トイレの同行者（全体）
※障害者対応トイレを使ったことがあると答えた人に占める割合(N=309)



次に、乳幼児／要介助者と障害者対応トイレを使ったことがある人が回答者全体に占める割合を、それぞれ乳幼児／要介助者と一般トイレを使ったことがある人が回答者全体に占める割合と比較する。図表６をみると、乳幼児と障害者対応トイレを使ったことがある割合（19.6%）は乳幼児と一般トイレを使ったことがある割合（41.1%）の約半分、要介助者と障害者対応トイレを使ったことがある割合（12.6%）は要介助者と一般トイレを使ったことがある割合（17.0%）の３分の２程度となっている。

続いて、同じく回答者全体を分母にした上で、障害者対応トイレを一人で／乳幼児と／要介助者と使ったことがある割合を、性別および性・年齢層別に比較する。また参考までに、一般トイレを乳幼児／要介助者と使ったことがある割合も掲載する。

性別にみると、障害者対応トイレを一人で／乳幼児と／要介助者と使ったことがあ

る割合は、いずれも男性より女性の方が高い。

性・年齢層別にみると、障害者対応トイレを一人で使ったことがある割合は、男性60～70代以外では３割を超えている。乳幼児と使ったことがある割合は、男女とも若い年代の人で高く、特に女性20～30代では半数に近い。一方、要介助者と使ったことがある割合は、女性40～50代において最も高い。図表２でみたように、障害者対応トイレを使ったことがある割合が女性20～30代で最も高く、男性60～70代で最も低いのは、前者では乳幼児と使ったことがある割合が特に高く、後者では一人で／乳幼児と／要介護者と使ったことがある割合がいずれも低いことによる。

図表６　障害者対応トイレ・一般トイレの同行者（全体、性別、性・年齢層別）

※回答者全体に占める割合（%）

		全体	性別		性・年齢層別					
			男性	女性	男20～30代	男40～50代	男60～70代	女20～30代	女40～50代	女60～70代
		N=587	N=292	N=295	N=97	N=96	N=99	N=100	N=98	N=97
一人で	障害者対応トイレ	32.2	28.4	35.9	32.0	35.4	18.2	35.0	32.7	40.2
乳幼児と	障害者対応トイレ	19.6	14.7	24.4	23.7	15.6	5.1	48.0	15.3	9.3
	一般トイレ	41.1	36.6	45.4	37.1	50.0	23.2	60.0	44.9	30.9
要介助者と	障害者対応トイレ	12.6	9.9	15.3	12.4	9.4	8.1	11.0	19.4	15.5
	一般トイレ	17.0	13.7	20.3	10.3	14.6	16.2	15.0	24.5	21.6

注：使ったことが「1年以内にある」と「1年より前にのみある」の合計

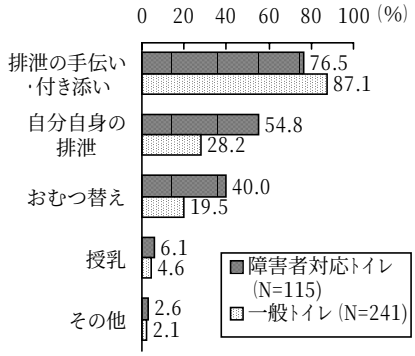
(5)乳幼児の同行時にしたこと

乳幼児と一緒に障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、その際に何をしたかをたずねた。図表７をみると、最も多いのは「排泄の手伝い・付き添い」（76.5%）であり、次いで「自分自身の排泄」（54.8%）、「おむつ替え」（40.0%）となっている。

次に、乳幼児と一緒に一般トイレを使ったことがある人に対し、その際にしたことをたずねた結果と比較する。一般トイレを使った際に比べ、障害者対応トイレを使った際に「排泄の手伝い・付き添い」をした割合は約10ポイント以上低いが、それ以外のことをした割合はいずれも高く、特に「自分自身の排泄」と「おむつ替え」をした割合は20ポイント以上上回っている。乳幼児と一緒の際に自分自身の排泄やおむつ替えなどの用途で障害者対応トイレを使う割合は、一般トイレに比べてかなり高いことがわかる。

図表７　乳幼児と一緒に障害者対応トイレ／一般トイレを使った際にしたこと＜複数回答＞（全体）

※乳幼児と一緒に障害者対応トイレ／一般トイレを使ったことがあると答えた人に占める割合



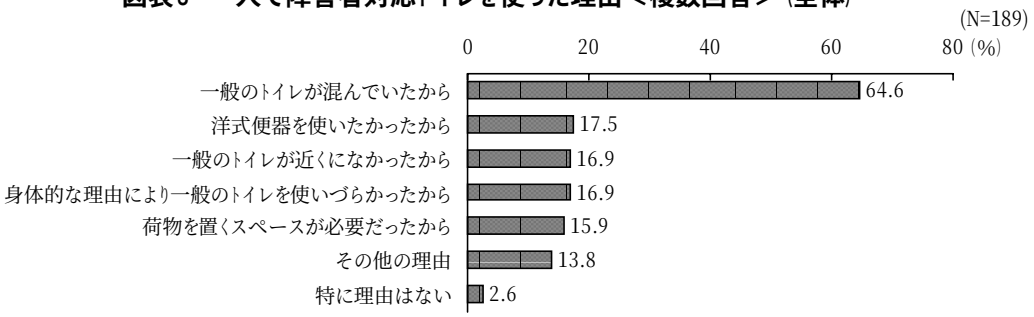
(6)使用理由

一人で障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、使った理由をたずねたところ、「一般のトイレが混んでいたから」が64.6%と非常に高かった（図表８）。それ以外の理由はいずれも15%前後であり、ほぼ横並びになっている。

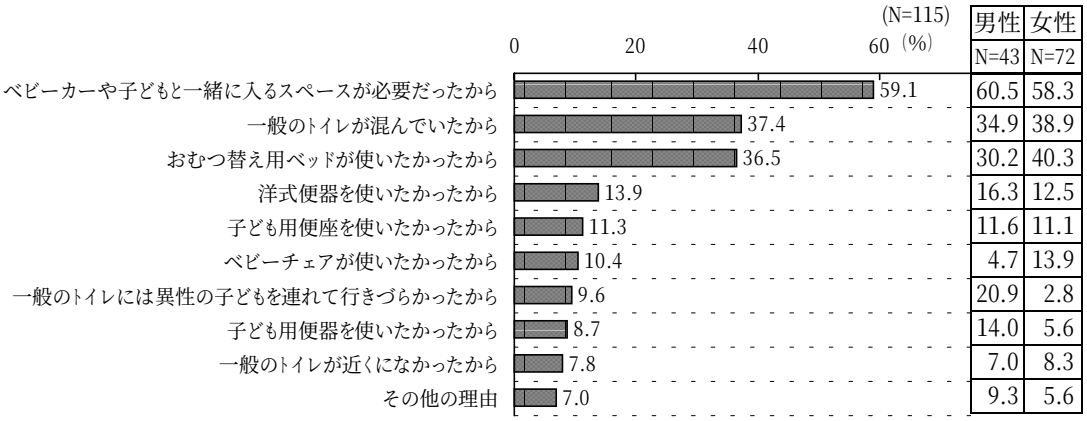
同様に、乳幼児と一緒に障害者対応トイレを使ったことがある人に対し、使った理由をたずねたところ、「ベビーカーや子どもと一緒に入るスペースが必要だったから」（59.1%）が最も多かった（図表９）。ベビーベッドやベビーチェア、子ども用便座・便器のような乳幼児用設備よりも、まずはスペースの広さが障害者対応トイレを使う大きな理由になっていることがわかる。また、一人で使った理由と同じく、「一般のトイレが混んでいたから」（37.4%）も上位にあがっている。一般トイレの混雑時に障害者対応トイレを使う人は、乳幼児と一緒の場合でも一人の場合でも多いといえる。

性別にみると、「おむつ替え用ベッドが使いたかったから」と「ベビーチェアが使いたかったから」の割合は、男性より女性の方が10ポイント近く高い。一方、「一般のトイレには異性の子どもを連れて行きづらかったから」は、女性では2.8%と皆無に近いのに対し、男性では約２割を占めている。異性の要介助者を一般トイレに連れて行きづらいという介助者の意見はしばしば取り上げられるが、男性が異性の子ども、すなわち女児を男性トイレに連れていく際にも、類似の抵抗感があるものと思われる。

図表８　一人で障害者対応トイレを使った理由＜複数回答＞（全体）



図表９　乳幼児と一緒に障害者対応トイレを使った理由＜複数回答＞（全体、性別）



	男性 N=43	女性 N=72
ベビーカーや子どもと一緒に入るスペースが必要だったから	60.5	58.3
一般のトイレが混んでいたから	34.9	38.9
おむつ替え用ベッドが使いたかったから	30.2	40.3
洋式便器を使いたかったから	16.3	12.5
子ども用便座を使いたかったから	11.6	11.1
ベビーチェアが使いたかったから	4.7	13.9
一般のトイレには異性の子どもを連れて行きづらかったから	20.9	2.8
子ども用便器を使いたかったから	14.0	5.6
一般のトイレが近くになかったから	7.0	8.3
その他の理由	9.3	5.6

3．障害者対応トイレに対する意識

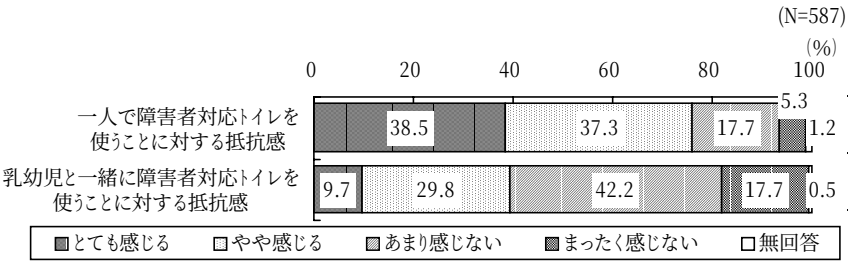
(1)障害者対応トイレの使用に対する抵抗感

1)抵抗感の程度

障害者対応トイレを一人で、および乳幼児と一緒に使うことに対する抵抗感をたずねた。一人で使うことに対して抵抗を感じる（「とても感じる」＋「やや感じる」）と答えた人の割合（75.8%）は、４分の３を超える（図表10)。一方、乳幼児と一緒に使うことに対して抵抗を感じる人の割合（39.5%）は、一人の場合よりは低いが約４割を占めた。障害者対応トイレを乳幼児と一緒に使うことに対する抵抗感は、一人で使うことに対する抵抗感ほどではないものの、少なくないことがわかる。

性別にみると、一人で使うことに対しても、乳幼児と一緒に使うことに対しても、男性より女性の方が抵抗を感じている。また、図表は割愛するが、性・年齢層別にみると、男女とも若い人の方が一人で使うことに対する抵抗感は高く、乳幼児と一緒に使うことに対する抵抗感は低い傾向にある。

図表10　障害者対応トイレを使うことに対する抵抗感（全体、性別）



抵抗を感じる割合（%）

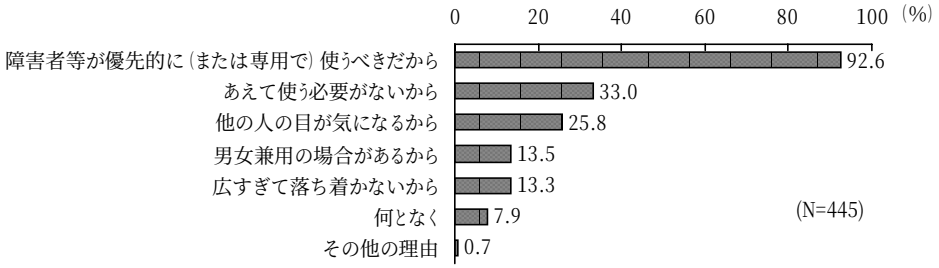
全体	男性	女性
N=587	N=292	N=295
75.8	69.5	82.0
39.5	37.0	42.0

注：「とても感じる」と「やや感じる」の合計

2)抵抗感がある理由

一人で障害者対応トイレを使うことに対して抵抗を感じると答えた人に対し、その理由を複数回答でたずねたところ、「障害者等が優先的に（または専用で）使うべきだから」（92.6%）が圧倒的に多かった（図表11)。これに続く「あえて使う必要がないから」（33.0%)、「他の人の目が気になるから」（25.8%）も、自分が本来の対象者でないという遠慮に関係している。なお、男女間では特筆すべき差はない（図表割愛)。

図表11　一人で障害者対応トイレを使うことに対して抵抗感がある理由＜複数回答＞（全体）

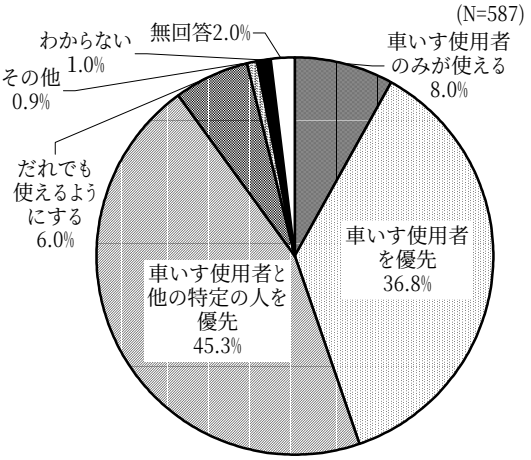


(2)障害者対応トイレの使用対象者

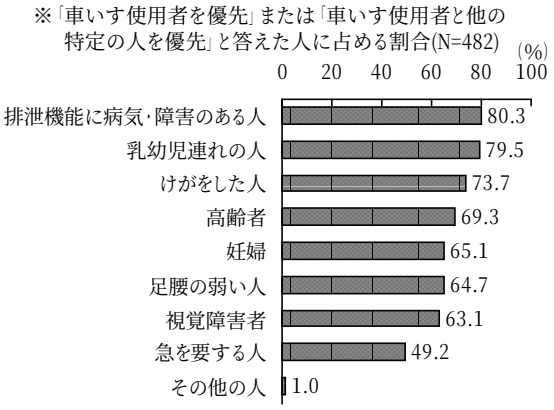
どのような人が障害者対応トイレを使えるようにするのがよいと思うかをたずねたところ、「車いす使用者と、乳幼児連れの人など特定の人を優先にし、他の人も使えるようにする（以下、車いす使用者と他の特定の人を優先）」（45.3%）が最も多く、次いで「車いす使用者を優先にし、乳幼児連れの人など特定の人も使えるようにする（以下、車いす使用者を優先）」が36.8%となった（図表12）。対象者が最も限定的な「車いす使用者のみが使える」（8.0%）と、最も限定的でない「だれでも使えるようにする」（6.0%）は、ともに１割未満である。一般生活者の多くは、一定の人を優先しつつそれ以外の人も何らかの形で障害者対応トイレを使えるようにするのがよいと考えているといえる。

この質問で「車いす使用者を優先」または「車いす使用者と他の特定の人を優先」と答えた人に対してはさらに、障害者対応トイレを使えるようになるとよいと思う「特定の人」とは車いす使用者以外にどのような人かを複数回答でたずねた。最も回答割合が高かったのは「排泄機能に病気・障害のある人」（80.3%）であり、次いで「乳幼児連れの人」（79.5%）、「けがをした人」（73.7%）となっている（図表13）。「急を要する人」以外の人に対しては、６割以上の回答者が障害者対応トイレを使えるようになるとよいと答えている。

図表12　障害者対応トイレの使用対象者（全体）



図表13　車いす使用者以外で障害者対応トイレを使えるようになるとよい人＜複数回答＞（全体）



4．まとめ

「だれでもトイレ」「多目的トイレ」などの普及とともに、障害者対応トイレは一般生活者にとっても身近なものになってきた。本調査によると、一般生活者の過半数は障害者対応トイレを使ったことがあり、うち６割強の人は自分一人だけで、４割弱の人は乳幼児と一緒に使っている。

また、多くの人は、障害者対応トイレの使用に対して現状では抵抗を感じているが、障害者対応トイレを車いす使用者以外の人、例えば他の障害者や高齢者、乳幼児連れの人も何らかの形で使えるようにすることには賛成している。少なくとも一般生活者の立場からみると、障害者対応トイレの使用者の範囲は、ある程度広い方がよいようである。

一方、障害者の立場からみると、障害者対応トイレの使用者が広く想定されれば設置数が増えるという期待がある反面、使用者が増えると排泄機能の障害によりトイレ利用を長時間がまんできない人などにとってはかえって不便になるのではないかという懸念もあることが、先行文献等では指摘されている。そのようにならないためには、使用対象者が広く設定された障害者対応トイレにおいても、どのような人が優先されるべきかという使用ルールが明示され、かつ使用者に理解されることが望ましいのではないか。そうすることによって、障害の有無にかかわらず障害者対応トイレを必要とする人は抵抗を感じることなく、使いたいときに使いやすい状況になると思われる。

また、障害者対応トイレだけに機能を集中させるのではなく、一般トイレに機能を分散し、その使いやすさを高めることも検討されるべきである。例えば、乳幼児連れの人の多くが障害者対応トイレを使う理由としてあげている広いスペースやおむつ替え用ベッドなどの諸設備は、障害者対応トイレでなく一般トイレでも設置可能である。また、一般トイレがもう少し広くなれば、障害者対応トイレを使わなくてもすむ車いす使用者も増える。予算やスペースの都合で難しい面もあると思われるが、一般トイレをユニバーサルデザイン化することも必要であろう。

今後は、今回の調査では対象としなかった障害者等の立場もより考慮しながら、障害者対応トイレのあり方についてさらに検討したい。

（研究開発室　副主任研究員）

【注釈】

*1　アンケート調査において、「公共トイレ」とは「住宅以外の場所にあるトイレ」を指すとした。

【参考文献】

・老田智美・田中直人，2001,「公益的施設の身障者対応トイレに対する健常者の意識」『日本建築学会大会学術講演梗概集』.
・国土交通省・交通エコロジーモビリティ財団，2002,『すべての人にやさしいトイレをめざして』大成出版社.
・坂本菜子，2005,『公共トイレ管理者白書』オーム社.
・日本トイレ協会，2003,『第19回 全国トイレシンポジウム資料集』.
・日本トイレ協会，2004,『第20回 全国トイレシンポジウム資料集』.